
異世界での私は富豪でした

かとう みき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界での私は富豪でした

【Nコード】

N1002Z

【作者名】

かとう みき

【あらすじ】

勝利を確信した乾杯の瞬間。異世界で別人の軀になっていた。磨き上げた美貌と軀は何処に？
そもそも帰れるのか？

没落した名門の家に生まれたお嬢様が、見事ゲットした御曹司。披露宴では人生の勝利を確信して乾杯のグラスを手にした。
しかし次の瞬間に居た場所は異世界。

しかも貧弱な軀と地味な顔に大変身。

地球には帰れるのか、再度磨き上げて玉の輿を目指すのか、どんな状況だろうと逞しく生きて見せます。

更新はゆっくりめです

1話 異世界の上に地味顔!?

はて?これは何事?

私は首を傾げた。

こっこののは……アレだ。

此処は何処?私は誰?みたいな感じ。

すると私は記憶喪失か……って、違うでしょ。

私は誰?が余計だったわ。

私は沙織。東郷沙織だ。

お嬢様学校にかるうじて通う、没落貴族の娘。

そして、生家の血筋と持って生まれた美貌と、様々なテクニクを駆使してゲットしたのは大会社跡取りイエッ!勝利!

そう。

勝利した。

私は人生勝った気でいた。

まさしく、乾杯のグラスを掲げたのは……つい先程だ。

その証拠に、私は視線を落とした。

ドレスを着ていた。

着ていない。

待てやこら。

口にした事も無い罵詈雑言が、内心嵐の様に吹き荒れた。

罵倒のバリエーションは我ながら感心する程……等と理性と感情が別々に暴走する。

「まずは、落ち着きましょう。」

高く、澄んだ声が出る筈だった。

何？風邪をひいたのとも違う。アルトの声。

うっかりすれば、甘い……少年の上品な声が、聞こえた。

この声に品を与えたのは、私。

と云う事は、これは私の声。

先程、罵倒した現実を再度直視した。

見下ろせば、豊かな胸を薄紅色のドレスが包んでいる………筈が。披露宴に着ていたドレスの代わりに、ストーンとした色褪せた藍色の様なワンピース。なのか？単なる長いシャツかも知れない。その下はジーンズ。こちらはキツチリ色褪せたダメージもの。

ストーンとしているのは………何も服だけではない。真っ直ぐにストーンと………布が落ちるのは………引っ掛かるものが何も、何も、何にも………無いと云う事で。

色気の無い服。

少年の甘い声。

いや、私の御曹司ゲット計画、甘い口調が………その声を甘くしたのかもだが。

私は、深呼吸した。

悲しいくらい………胸元は動かなかった。

女は度胸だ！
行け！沙織！

女じゃ無いかも知れないけれどね？

暴走して分裂する、私の理性が眩いた。

あつた！！！！

良かった~~~~~っ！

微かだけでも有ったわ。

女の子だった。

嬉しい。

厳しい現実で、性別まで男だったら泣いたよ私。

ああ。

でも、やっぱり泣くかも。

半分諦めてたから感涙

いや。

感涙してる場合じゃないだろう？

まあね。

そりゃあね。

先程迄、ばら色ドレスの張り切りバディから変化した、貧相な程のホッソイ軀。

先程は、華やかなパーティー会場で、ドレスアップした人々の視線が集まっていたが……今、誰も居ない。

人っ子一人居ない。
何故か車？が一台。

そして見渡す限りの……………砂。砂。砂ばかり。

此処は何処？此処は砂漠。

そして、今は曇り空だが……………昼間？夕方かな？

だから。

これは何事？

誰か教えるやゝゝゝっ！

声に出さずに、叫んでみました。

私は誰？も……………こうしてみれば……………切実な問いになる。この軀は誰なのでしょう。

そして、私の軀は何処に？

結局、心で叫んでも何にも生まない。
当たり前の話だけ。

取り敢えず、砂以外の物を観察と点検。
もしかしたら、食料が有るかも知れないし。
もしかして、此処に関する手掛かりが有るかも知れないし。
もしかして、この……………軀に関する手掛かりも、有るかも知れない

し。

まあ。

先程は取り乱してしまっただけけど、アレよ？異世界？とか、別人の軀？とか、なあんて話が有る訳は無い。

と、なれば。

これは、有る種の誘拐。罖。陰謀と云うもの。

パーティー会場からどうやってか意識を奪い誘拐。私の魅力溢れる肉体を、貧弱極まりない軀に手術迄した意図は不明。嫉妬かしら？

大戦後は砂漠の地域も多いと聞くし、現実には大して移動してなくて、まさかのこれが電脳世界と云う事も有り得る。

最近はおx世界も機械も発達してて、違法ユーザーは、マイB
ox以外からもアクセスが可能だとも聞く。

もちろん犯罪だけだ。

誘拐なんてする輩が、律儀に法律を守るとも思えない。

それ以前に、誘拐が違法だったわね。

しかし……違法アクセスはユーザーに違和感を与えずにおれないと聞いた筈だが、これは。

曇り空の湿っぽい空気が肌に纏わり付く……不快感。

ほんの少し離れた位置に有る、車らしき物を目指し歩けば、砂を踏む感触。

色気の無いブーツが有り難いと思える程に、歩き難い。

現実かも知れない。

と、なれば……この軀も現実か。
私の旦那様は愛想を尽かさないだろうか？

大して慌てもしないのは、既に入籍が済んでいるからだ。
彼をゲットした嫉妬から、こんな目に遭ったならば、この姿に愛
想を尽かして離婚されたとしても……元は取れると踏んだ。

ふふふ。

慰謝料たっぷり。

その為には帰らないと

私は張り切っていた。

結論。

此处……異世界。

いや……私が無知だからそう思うのかも。 そうなのかも。
逃避する心を嘲笑う空間が有る。

「うわあ……砂だらけだね？ ちょっとシャワー浴びておいでよーっ
わ、うわっ、何々？ 何だよう！？」

やっぱり。

生きている。

いや……ロボットかも知れないし！

柔らかな毛皮の、空を跳ぶ猫。

ロボットはドールさえも超えたと評判だし！

元気に喋る猫。

「何なんだよう!？」

手を離せば涙目で距離を取り、私を視つめたのは……空間に赤ちゃんがオスワリする様に浮かんだ……茶虎の仔猫。

「シャワー……。」

私は殆ど呆然としたまま呟いた。
猫は直ぐさま不機嫌を忘れてた。

「え？入る？お風呂 シャワー浴びる？」

私が頷けば、ウキウキと案内してくれる……猫。

取り敢えず。

シャワー浴びて、頭をスッキリさせよう。

車だと思いたかった。

でっかい車だと信じたかったよ。

しかも小さな小屋程度の、車でもオカシクないサイズのアレの中に……この広々空間。

無理だ。

猫はロボットでも……空間歪めたり、広い空間ゲットする欲望
自体が、地球には無いよ。

だって。

大戦後の世界は、一部の優良階級しか、リアル世界に暮らさない
んだもん。

人不足が、ドールを迎え入れた。レプリカを必要とした。

地上は余り、砂漠に緑を戻す研究も……出資する者の意図は、単
なる趣味。慈善の延長でしかない。

昔は溢れる程に、地球に存在したと云う人間は。

その大半が電脳の世界に生きる事になった。

外で生活するには、弱すぎる……と云う理由で。

だから、こんな技術は求められる事さえも無い。

特に、地上に……リアルに生きている中でも、上流に続する人間
は……機械嫌いが揃っている。

こんな怪しい乗り物ではなく、大戦前のモデルを模した、クラシ
カルな車に乗る。

便利な道具は、特にBoxは……小さなパソコン扱いをされた。

最高の階級……第四階梯の血を持つ人間が、殆どと云って良
い程……それこそ十人居れば九人迄は、電脳世界に入りたがらない
からだ。

その事実が、上流世界の機械嫌いを促進したとも云えた。

逆に、市民達は遊び場所としてBox内を利用した。
流石に、何度命を落としても、再生可能な第四階梯とは違い、夜の繁華街などは………Box内に通う方が安全だったからだ。

浴室に入り、嘆息した。

そこに有った窓に気付かずドキリとしたが………広がる景色に目眩がした。

何処迄も………非常識。

車だったら良かったのに。

これは、中に入れば空間が広がる。

そして空を飛ぶ。

宇宙迄、飛ぶ。

何か………疲れた。

そう思って、頭を振って、シャワーを浴びようとした。

全身を映す………鏡が有った。

肌は白い。

だが、私が磨き続けた肌の、ミルクの如き滑らかな白さでは無い。
寧ろ、青白い………と云うべきだった。

倅い、肌質は悪くない。磨けば光ると思われた。

胸は無い。

いや、有るが。

ちゃんと女の子だが………悲しいくらいに貧乳。いやいや、形は良

い。多少は育てられる。

豊かと迄は行かなくとも、魅力有る胸にする事は可能だろう。

腰の細さは悪くない。

しかし、全体的に筋張った細い躯は、とにかく沢山食べて、柔らかな肉体を手に入れるべきだろう。

その上で、締めるべきところを締めるべし。

足も真っ直ぐで良い。

歯も白く美しい。

髪は多少毛先が荒れている様だが、薄い青銀の綺麗な真っ直ぐな細い髪が腰までの長さを誇り、夢の様に美しい。

悪くない。

うん。

悪くない。

様々なパーツはね？充分に私が磨き上げて、育てる事が可能な、美女の原石だった。

だが。

「地味な顔っ!？」

様々な原石材料を持つのが勿体ないくらいの、地味フェイス!

いやいや。

私は何とか立ち直る。
女には化粧と云う武器が有る。

寧ろ、化粧等で誤魔化し切れない部分が宝石もかくやの原石なのは………ラッキーと云うべきだろう。

うん。

逆よりも………本当はこの方がより難易度が高い美女を目指せる。

って、夢中になってどうする。

いや、やはり大切か。

此処が何処かは知らないが、少なくとも、私が知る世界では無い。
地球に帰る方法と、元の軀に戻る方法を入手する迄は………この軀
で生きなくてはならない。

どうやら、この軀で生きてた人間は確かに居る様だし。
と、話し掛けて来た猫を思い出す。

問題は。

この少女の振りが出来るか否か。
そして、正直に、今の状況を………話すかどうか。

地球では、それは自殺行為に等しい。
人嫌いの病持ちとして、人前に出られなくなるだけだ。

この世界では。

どうなのだろうか？

慎重に。

見極めなければならなかった。

2話 魔法？それとも？

うっ。扉って感じ。何か、車のドアと云うよりも、建物のドアな感じ。しかも特殊な自動ドアっぽい感じ……。

ノブも取っても無いし……如何にも金属な、特殊な倉庫とか、立入が難しい場所とかの……と云うか何て云うか……不思議な乗り物と云うか……ええと。

近く迄来てもよく解りません。

車？

では無い。多分無い。

小屋？

存外高さが有る。だが、ギリギリで乗り物でもOKな範囲では無いかしら？2Mくらい？

ゆっくりと、私は距離を保ったまま、それ周囲をグルリと回って見た。

ほぼ2M立方体。

材質は何かしら？キラキラしてる。少し……発光してる？

ドアらしき物がひとつ。

後は密閉された少し歪んだ四角い建物……か乗り物。

何故乗り物にこだわるか？

その理由は、地面とソレの接点に有る。

薄い石が、ソレの角と砂の間に挟まっていた。

建物なら、それは除ける様な気がする。

恰も、ソレは上空から無造作に置かれたかの様な状態なのよね。

まあ、そんな乗り物も有るでしょう。

この型式で売れるとは思えないけど……。

何て云うのかしら……恥ずかしいんだけど。

特殊な乗り物。不思議ちゃんな乗り物。

口にするのは非常に恥ずかしいけど……昔懐かしい未確認飛行物体みたいなの？

アハハSFだ。でもSF好きなら、もう少し形がねえ？何とかならなかったのかしら？

異星人との交流前のUFO的なモノを模して有るんでしょう？これ？

色や材質はソレっぽいのに惜しいわね。

調べないと正確には解らないけど、多分円盤型とかなら高く売れる気がする。

割とマニアって根強いものが有るから。

貧乏な癖にお嬢様学校通う為に……お世話になったわ。

我が家の倉のモノをコツソリ売り払う際には、マニアの存在の有無は大変重要でした。

様々の分野に居るのよねえ、彼らって。

うちが没落してなかったら、多分あの人達って絶滅したと信じて生きて来た筈だわ。

でも惜しいわね？いや。もしかして、この形をしたUFOが出るアニメとかが存在したのかも？だとしたら、マニア度高い？しかし……その場合はマニア数が如何程かが問題よね。

こんなもの用意しちゃう人がソレなりの数存在するなら、マニア数少なくとも十分に商売に……あ。

私、玉の輿に乗ったから、もう必要無かったわ。

両親が莫迦やって潰した会社は旦那様が再建してくれたし、持ちつ者から持たざる者への贈与は寧ろ奨励されてるから手続きも簡単だったし。

両親が会社に手を出せない様に手続きもしたし。

特にお金に執着する理由は、もう無い。

でも、姿変わった事とか、誘拐された事実が傷と思われて離婚されたら…… 慰謝料は貰おう。うん。がっぱり貰おう。

そうしたら、もう結婚しなくても良いかな

慰謝料で悠々自適な生活……うっとり。

でも、稼げるところで稼ぐのは大事だとも思います。取り敢えず、帰ったら、この乗り物検索してみよう。離婚されそうにないなら不要だけど。

ああ。また、お金の事を考えてしまいました。

貧乏染み付いてて、恥ずかしい。

それに、別に商売の偵察に来た訳でも無かった。

手掛かり調べるのよね。うん。

まあ、怪しいけど。悪意は感じられないし。近付いてみようかな？
大丈夫かな？

距離を保ったまま、ドアの前を右から左から観察する。
うつつん。やっぱり解らないわね。

普通なら近付く気にはなれないかも。

でも、見渡す限り砂漠だし。これしか手掛かり無いし。
よし。

私は、度胸を決めて、一步踏み出した。

そのドアに、後…数歩で手が届こうと云う時。

音も無く、滑らかに、そのドアが中央から開いた。

ああ、やっぱり自動ドアな感じ……………でも、アレは??????

「もつつ。ミイル様ったら！なあに表でウロウロしてんだよう。早くシエルデインに帰ろうよう。アシエル様帰って来ちゃうじゃんかあ！」

これは……………何？

猫が……………喋った。

いや。

いやいや？

仔猫……………の、ロボット？か……………な？

ええと。

少年の声で。

小学生くらいの、高いソプラノの。

今の私より高い声で。

少年が猫で。

しかも飛んでる。

いや。

浮かんでる。

ええと。

これはあ。どう解釈するべきなのかしら？？？？？？？？？？

此処。

何処？

しかし。

あの四角い物体にはドアしか無かったのに。

いや。

考えまい。

大体がして、あの中にはシャワー室だの居間だの簡易キッチンだの……ましてや、こんな部屋だの入らない。

何ですか？コレ？

宇宙船ですか？

ドール達の巨大な船とは、またかなり違いますね？

目眩がする。

そう云うと、ベッドに押し込まれた。

いや、まあ……猫には無理だな。正確には追いやられた。

シャワーから出て、やはり仔猫が飛んで来た……文字通り飛んで来たのに、コレもやはり幻覚では無かったかと、私は頭痛と目眩を覚えた。

この部屋。

宇宙船での、寝室としてはどうなんだろう。

キングサイズのベッドは天涯付き。

サイドボードには高そうなお酒。未成熟な軀だが、成人？それとも他の人の？いや……未成年でも飲める法律の可能性も。更に云えば、外見で年令など解らない。

私だって……何百年経っても外見変わらない処置はしてるし。

クローゼットと、如何にもティータイム用の小さめの白い丸テーブルと椅子が二脚。

細やかな細工。繊細な家具。

書きものをする為の机と椅子は重厚。
小さな書棚が机上に造り付けの様だ。

出窓には白いレースと、落ち着いたベージュ地に花とも蝶ともつかぬ柄がモスグリーンのカーテン。

高級且つ上品な部屋。

この宇宙船が、住まいと考えるのか。単なる移動手段か。宇宙船の部屋が、通常の部屋に勝る事が有るのか。

それに依り大きく変動するにせよ、少なくとも……貧乏人の船では無さそうだ。

寧ろ、かなりの財力を予感させる。

壁紙はクリーム色。よく見たら、蔦ね柄が入っている。

窓の枠組みも安っぽさとは無縁………見ない様にしていたが。

窓の外は………宇宙。

そして私は私でない誰かの軀に入って???いる。

コレって。

何て云うのかしら。

魔法なの?科学なの?

SFなの?ファンタジーなの?

それとも。

私は幻覚を見てるのかしら。

例えば、精神を病んで、今……病院で治療中とか？

乾杯したお酒に、幻覚剤が入っていて、私は旦那様に迷惑かけまくり中……とか。

無いな。

乾杯前だったよ。

此処に来たの。

でもって、精神の病。

無いわあ。

多分、私は凄く凶太い神経だものね。

暫くは体調を崩した振りはするけど。

でないと、様子がオカシイと速攻バレる気がするし。

どうしようかな？

魔法だか科学だか知らないけど、私はこの躯の持ち主の振りをして、バレないものかしら？

例えば、記憶喪失？

下手にソナナもの装うと、病院だ何だで調べたらバレるかもだし。やっぱり、曖昧な言動で乗り切りたい。

しかも医者が必要な程度の、体調不良。ガリガリで蒼褪めた顔色は説得力抜群でしょう。

口数少なく周囲の様子を伺って、今後の対策を練るべし。

さあ。

気合いだ沙織！

何だかワクワクしちゃうわね

未知への恐怖と期待に震え、私は取り敢えず。

眠りました。

乾杯をして、旦那様が『私』に笑いかけ、『私』も微笑み返している。

その『私』は、確かにそれなりに優雅に振る舞うが、何故かいつもより動きが固い。

幼少時より自らを磨き、立ち居振る舞いも、周囲を惹き付ける為の研鑽を惜しまなかった。

そんな『私』の動きでは有り得ない。

視線を感じたみたいに『私』が私を見て、微かに笑った。

その笑みも、仕草も。私が到達した女性の魅力溢れるそれを、全く活用していない。

しかし周囲は気付かない。『私』は一応気品と優雅さを失わない。『私』は私の美貌を失わない。

だが。

その『私』は……私では無い。

不意に、手を引かれた。

けれど、今の私には軀が無い筈。

誰も、私を見ない。見えない。

私自身にも、私が見えない。

見えるのは、私でない『私』の姿だけなのに？

引かれるまま、私は逆らう気持ちさえ湧かない。これは、どういう事だろう？

素直に従ってしまう。

手を引かれたまま、私は……『私』の前に立ち、『私』の中に入った。

何これ？

白い靄が立ち込める、広いのか狭いのか解らない空間に出た。

ええと。

これは『私』の軀を擦り抜けた……と云う事かしら？

首を傾げた。
気付くと、私は肉体を纏っていた。
手が有る。
軀も。

……貧弱な軀のままだった。

夢の中でもコレなの？

嘆息して顔を上げると、目の前に『私』が居た。

先程見た、私で無い『私』だった。

「寝てるの？」

「ええ。あなたは？」

『私』はオカシそうに笑った。

「もちろん起きてるわよ？見たでしょう？披露宴の真っ最中だもの。」

「あなたは誰？」

私の顔で、姿で、随分と半端な身ごなしで……気持ち悪い。

「解ってる癖に。」

『私』が笑った。

「この子……なのね？」

私は胸元に掌を寄せて、今の自分を指し示す。

「そうよ。私はあなたと入れ代わったの。あなたの人生を貰うから、あなたには私の人生を上げるわ。」

随分と身勝手な話ね。

しかし、抵抗の方法も持たないから、せめて情報なり何なり、取れるものを取らないと。

「戻してと云っても無理なのかしら？」

「そうね。ダメ。」

念の為尋ねたが、やはり駄目だった。
ならば情報か。

「あなたは普通に、私として振る舞えるみたいだけど、私には何の情報も貰えないのかしら？」

「今は……船？」

「ええ。」

「机の上に小さな棚が有るの。解る？」

「ええ。」

「そこに、銀のリングが有るから、それを手首に嵌めたら良いわ。」

そう云うと、話は終わりとばかりに踵を返すから、引き止めた。

「そのリングは何？嵌めると、どうなりますの？」

「私のメモリーだから、私が持つ記憶も知識も全部……あなたのものになるわよ。人格以外はね。」

面倒臭そうに云うと、今度こそ背を向けて、消えてしまった。

「メモリー……………って、記憶？」

変な夢。

そう思ったが、私は紫檀らしき机の前に立った。

「……………」

ここは。

こう云うべきではないかしら？

マジかよー！？

銀のリング。正確には、銀色のリング。

材質は銀では無いわね。寧ろプラチナに近いけれど……………それも違う。何かしら？この金属。

さて。

嵌めて大丈夫なものかしら？

特に、その材質以外に見るべきものは無い。

何の変哲もないリング。輪っか。

しかし……………メモリー？

あれは、ただの夢で、これは単なる偶然……………と云う可能性もある。

いや。

その可能性の方が常識的だ。

でも。

今は非常識な事態のオンパレード。

女は度胸。

常に前向き。

冒険無しには何も得られない。

行け！

沙織！

私は気合いを入れて、リングに左手を通した。

3話 納得…してしまいました

目覚めたら、そこは宇宙船のあの部屋では有りませんでした。

おや？

ベッドの天涯が違う。

柱の細工も違う。

おお！

お部屋も豪華。

しかも趣味が良いと云うか品が有る。

壁紙の金糸も、うっかりしたら成金趣味だけど、手前でグッと抑えて品の良さを失わない。

ヨダレものです

いえ別にチヨロマカスつもりはナイですよ？

……いや。

もはや「私」のモノでしたね……。

どうやら腕輪のアレコレの間は気を失ってたと思うが、その間に目的地に着いて運ばれちゃったらしい。

記憶を探れば「この部屋」が「私」のものだとも知れた。

うつぬ。他人の記憶を「思い出す」のって気持ち悪っ。

えっ。

ちよつと途方に暮れた。

毎日お腹一杯食べる為に、私は儉約と金策を常に考えてました。毎日お腹一杯に食べ、我が家の栄華を復活させる為に、私は玉の輿を目指して自分を磨きました。今のこの私はお金持ちです。

何を目的に生きてたら良いのでしょうか？

解つちやいたけど、凄いわあ。

キラキラの洪水。

建物もだけど………なんて云うか、人間が。

正直引く。

この世界も上流階級は美形の宝庫なんだな………ならば、この少女は大分生きるの苦労したのかしら。

元は悪く無い筈だけど、磨き方も知らない色々と宝の持ち腐れ状態ですものね。

パツと見がやたら地味だし。下手したらブスと云われ兼ねない。しかし記憶を探ればそうでも無かった。

あら？モテてる？

しかもキラキラの人達にモテモテ。

この世界では「力」を持つ事が「美人」の条件らしく、この軀はかなりの「力」の持ち主らしく、だからかなり「美人」な訳だ。と云うか、力が有るなら美女な「筈」……………と云うべきかな。

美意識自体は特に向こうと変わらないからから、観念的な意味合いかな。それが罷り通るのが凄いいけど。

「大丈夫なのか？」

とキラキラ1号が云う。

正直。この1号が諸悪の根源とも云えるから、私は恨んでも良いとおもっただが。

「ええ。少し、楽になりました。」

私は心配させない様に、笑顔を浮かべて見せた。うん。少し体調悪そうなフリでね。

後は少しお茶飲んだら、俯いて黙ってればヨシ。ちよっと疲れた様にソファアの背に凭れるのも良し。

正直この諸悪さんに気付く迄は、帰還方法を探す気満々だったんだけど。

困った事に、気付いてしまったから仕方ない。

別に、彼女が……………と云うか今の私が、富豪だったからでは無いですよ？

そんな理由は、……………半分だけですとも。ええ。

ついでにちよつと新たな、お商売考えついてワクワクしたのも、少ししか関係無いです。

だって既にお金持ちですものねえ。

全く。

困ったものだ。

何だかんだでモテモテだし。既に富豪とさえ云えるお金持ち。しかも家柄は特上。家族仲は良く。愛情たっぷり。

既に存在する婚約者も、キラキラで家柄財力バツチリの爽やか青年。

不自由も不満も何一つ無くて、故に何を目標に生きれば良いのか悩みます。

あら、何て贅沢な悩みでしょう。

お金持ちが優雅なのが解った気がする。

でも「私」が富豪なのって、なんと「家」だけでなく、彼女自身が稼いだからなのよね。

だったら私もちよつと稼いでも良いのよね？

正直、絶対儲かると思うの。

別に、有り過ぎて困るものでも無いものね

うふふ。

うっかり正体バレて追い出されたり、婚約解消されたりしても大丈夫なくらいは稼ぎたい。

と、なれば。

やはりこの身体も。

キツチリ磨いて、魅惑の美女に成らなきゃだわね

目的が有るって素晴らしい。

それは。私が貧乏性だからかしら？

ベッドの上に起き上がると、私はゆっくり伸びをした。

よく寝た。

多分。

あのキラキラ1号が運んだのだろう。

総ての記憶をチェックした訳では無いが、船？が帰還したとき遭遇するだろう相手くらいは先に「思い出して」おいたのだ。

ふと、気配を感じた。

予兆、とでも云おうか？

扉を見やれば、それがゆっくりと開くのが見えた。

メイドのお仕着せを着た女が、俯き加減に入室して私を見た。

「ミイル様。まあ起き上がって大丈夫なのですか？」

心配そうな眼差しに、ちよっぴり心が痛みました。

その心は良心と呼ぶのでしよう。

そして。

キラキラ達が報告を受けてやって来た。

「だっ」

「大丈夫なのミイル？ああ、まだ顔色が悪いわ。何か温かい物でも。」

最初に、キラキラ3号美しい男性が心配そうに私に語りかけ……
…ようとして、押し退けられた。

キラキラ2号美しい貴婦人が、3号を押し退けて私に駆け寄り、私の顔を両手に挟んで覗き込んだ。

「大丈夫。もう何ともないわ。」

私は少し無理してます、みたいな笑顔を作り健気に告げた。

「ミイル。あんまり心配させないで頂戴。聞いた時には心臓が止まるかと思っただわ。」

貴婦人が私を抱き締めた。

そして、キラキラ2号の肩越しに、キラキラ1号が安堵した様に微笑んでいた。

3号は父。

2号は母。

1号は兄。

美しい兄は、旦那様と同じ顔をしていた。

そりゃあ入れ代わりたいたらう。

家族を「思い出し」た時と、同じ事を思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1002z/>

異世界での私は富豪でした

2012年1月6日06時48分発行